

第12回「日本語大賞」

テーマ「心にひびいた言葉」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

「笑顔が集まる場所」

ベルギー

ブラッセル日本人学校

中学部三年 笠原 清珠

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

笑顔が集まるころ

ブラッセル日本人学校 中学部三年

笠原 清珠(かさはら・すず)

「笑顔の周りには笑顔がある。その笑顔が集まるころにあなたはいる。」
クラスの先頭として前に立つて頑張つて、苦勞して、それでも頑張りが空回りしているように感じていた私にかけられたこの言葉は、私の心に強くひびいた。

二年生もおわりに近くなったころ、先輩方から私たちへ委員会やクラブのバトンタッチがあった。私は、委員会とクラブ共にリーダーになった。これからは私たちが中学部を引っばつていかなければならない。それがすごくプレッシャーだった。その上、三年生を送る会の実行委員長にもなり私は毎日学校を駆けまわっていた。あれもやらなきゃ、これもやらなきゃ、考えることがいっぱい。今にも頭が爆発しそうだった。しかし、後輩たちがちゃんといつてきてくれない時があった。私はどうすればいいの、私がいけないの、私はみんな楽しく過ごして欲しくて同級生と一生懸命考えて後輩たちに伝えたのに。それが伝わっていないものすごく悲しかった。これで先輩方に感謝がきちんと伝わるのか、中学部全体が楽しめるのか不安でたまらなかった。必死にみんなの意見をまとめ、企画を完成させた。そして、なんとか会を作りあげることが出来たが、会の最中にみんなの顔が見られず、「楽しかった？」

と聞くことができなかった。つまらなそうだったらどうしようと考えだしたら周りをみるのがすごく怖かった。クラブのときも同じで、ネガティブなことばかり考えてどんどん自信をなくしていった。最初は前を向いて、責任をもって頑張つていこうと思えていたのに、この時は下を向いて今にでも立ちどまってしまいたいそうだった。なによりも、きちんとみんなをひっぱれないことが悔しかった。

そんな気分のまま、二年生最後の日になっていた。それは、委員会と一緒に頑張つてくれた先生や、私を支えてくれた大好きな先生が日本へ帰ってしまうことを表していた。ただでさえ不安なのに、来年のことを考えるともつともつと不安だった。その時、大好きな先生が一通の手紙をくれた。その手紙を読んでみるとある言葉が私の心にひびいた。

「笑顔の周りには笑顔がある。その笑顔が集まるころにあなたはいる。」

安心する優しい字でこう書かれていた。心配しなくてもきちんとひっぱれてたよと私の頑張りを認めてくれていた気がした。私を見てくれていて人がいて本当に嬉しかった。それと同時に、自分は間違えていなかったんだと安心することができ、自信をまた持つことができたように思った。

自分では気付けないことがたくさんある。自分がだめだと思えば、周りのことすべてがだめに思えてしまう。そんな、自信を無くしかけていた私に、先生がくれた言葉がまた頑張る力となってくれた。周りだけではなく、私もみんなと笑顔になることができたのだ。これからは、先生からもらった言葉の通りにいられるように、努力を怠らず自信をもって進んでいく。そして、笑顔が集まるころで、先生のようにみんなを勇気付けられるような言葉を紡いでいきたい。